

## CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

今年は、隔年で開催されるベニスビエンナーレはじめ、5年ごとのドイツ・カッセルのドクメンタ、そして10年ごとのミュンスター彫刻プロジェクトなど、ヨーロッパでは現代美術の大きな催しが目白押しです。スイスで毎年開催されるアート・バーゼルも含め、そのほとんどが6月にオープンするので、この期間は、世界中から多くのアート関係者がヨーロッパに向かうのではないのでしょうか。

それらのアートイベントに先駆けて4月23日～29日までオーストリアのウィーンではヴィエナアートウィークという美術の催しが開催されました。今年で3回目を迎えるこの催しは、その名の通り、1週間ウィーンでアートに触れるというイベントで、中央、東ヨーロッパのアートマーケットの中心となっているヴィエナフェアと同時に開催され、ウィーンの様々な美術の機関が、ウィーンや世界中から訪れる美術関係者に向けて、様々なプログラムを用意していました。

ウィーンは音楽と芸術の都として、あるいはハプスブルク家が築いた豊富な歴史的遺産とともに観光都市としても知られた街です。ヴィエナアートウィークは、そのウィーンを美術の街としても知られるよう国際的に発信していこうと、2005年にウィーン市内にある25の美術館や博物館、美術大学、そしてギャラリーアソシエーションが一体となって始められました。そのコンセプトは「Take Time Meet Art Vienna(時間をとって、美術そしてウィーンと出会う)」。アーティスティックディレクターのブンケンホーファー氏によると、ウィーンは他の大都市、ニュー

ヨークや東京のような慌ただしさが無いのが特徴で、時間がゆっくり流れ、街もコンパクトで、人々はゆったりとカフェで時間を過ごす、アートウィークでそういうウィーンらしさに触れてもらいたいのだといいます。ヴィエナアートウィークは世界中の都市で開催されているアートビエンナーレのような大きな一つのイベントではなく、ウィーンの街中に小さなアートシーンがたくさんある、そういったウィーンらしいものにしていきたいということでした。

オープニングのウィーンを代表する美術館の館長討論では、ウィーンをいかに国際的な文脈で発信していくかというテーマで、激論が交わされました。クリムトやシーレだけではなく、優れたオーストリアの美術を、外国人が評価してくれるのを待つのではなく、自分たちが評価し、位置づけをして世界に発信していかなければならない、また、ウィーンのアートシーンの重要な部分を構成する、現代美術の分野にもっともっとお金と力を入れていかなければいけないと強く主張されました。近年変化の激しい日本の公立美術館の状況下にある私たちも、日本のアートシーンの一部として、私たちができることについて、もっと考えていきたいと思いました。(hina)



パネル・ディスカッション「Content Counts! Vienna's Museum as Think Tanks for the Art World?。」 ©Rainer Fehrer, 2007